

「すべての民が救われる」

マルコによる福音書 8章 27-33節

森島 牧人 牧師

主イエスの「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」との問いに、「あなたは、メシアです」と答えたペトロ。長く待っておられたその答えを得て、主イエスはいよいよ十字架への道へと踏み出されることになるというのが、前回の学びでした。この弟子を代表してのペトロの咄嗟の信仰告白、それは人間によるものではなく、神が言わせた、神に導かれたことによる信仰告白でした。マタイの福音書 16 : 17にも、「シモン・ペトロが『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた。すると、イエスはお答えになった。『シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。』」と記されていて、ペトロの信仰告白が神によるものだったことを主イエスが明らかにされています。

さて、今日の聖書の中に、ペトロの信仰告白の後、「するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。」(マルコ 8-30) という記述があります。なぜペトロの信仰告白を受けて「それを宣べ伝えなさい」と言われなかったのか、私たちの中に疑問が生まれます。そのことについて考えてみたいと思います。さて、ここに出て来る「戒める」という言葉は、神の力を表すもので、この時主イエスは神と同じ力と権威を持ってこれを語られたのだったことが分かります。主イエスが権威ある言葉をもって言われた「だれにも話さないように」には、どのようなお考えがあったのでしょうか。

長い間、すべてのユダヤ人は、自分たちを救ってくれるメシアが現れると信じて待ち続けて来ました。彼らの待つ「メシアによってもたらされる救い」は、ユダヤの民に限定されるものでした。信仰告白をしたペトロも同じように考えていた可能性があります。しかし、主イエスが来られたということの奥義、それは主イエスの十字架の出来事、すなわちすべての民が救われることにありました。ペトロの告白は、この奥義を理解してのものではなかったのです。すべての民をあまねく救うために降りて来られた主イエスにとって、「ユダヤの民だけのメシア」として人々に迎えられということは、不都合この上ないことだったのです。「だれにも話さないように」と戒められた理由はここにあったと思われる。

弟子たちを戒められた後、主イエスは自分が殺されること、そして三日目に復活することをはっきりとお話しになります。聖書は「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」(同 8 : 31-33) と続いています。信仰告白をした直後、主の受難の予告につまずいて主をいさめるペトロの中に、主イエスは威力を持ち始めたサタンを御覧になったのでした。この場面から私たちは、光に近づくほどに自身の影が濃くなるように、信仰が深まって行く中で、不信仰の舞台もまた作られて行くということを知らなければなりません。

信仰は、人間すべてのメシアである主イエスとの問答を繰り返し、立ち止まることなく歩み続ける中で与えられるものです。日々の生活の中で福音を告白しながら、主と共に歩んで行きたいと思えます

(説教要約担当 羽入田悦子)